

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 6年 2月17日
(129号)

中之島ニュース

【事務局】 〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
古田修平

「志は師によって立つ」

木南 一志 先生

(一月度特別講義より)



■人を看るに只後半截を看よ

人間は生きていく上で気づかされることがあります。教えられて気がつくことと、そして自分自身を通り過ぎ、そして自分自身が通り過ぎわかつていくのか、おそろく頭のどこかでわかつていくのか、そうだったのか、と気づく。私自身若いころは随分世の中に迷惑をおかけしてきましたが、そんな私が救われたのは「人を看るには只後半截(はんせつ)を看よ」という『菜根譚』にある言葉です。

人の評価は人生の前半ではなく後半を見るがいいと解釈していますが、この後半というのは一日に置き換えてみると、始まったこの一日の最後をどう過ごしたかと振り返ることができると思います。

囲碁には捨て石があります。勝ちにいくためではないが打っておく石のことです。「後半截を看よ」の言葉は、人間三〇歳までに捨て石を打つということではないか。それは無駄のように見えても、振り返ったときに、自分の人生の横糸となつて彩りを作っていく力になつていく。あとから捨て石が勝ちに転じることもある。自分で決め、一生懸命やつても失敗はあります。しかしその経験は決してゼロにはならない。森信三先生は「人間はなぜ迷うか」との問いに「山に登らないからだ」と答えておられます。山の頂上に立てば、どこから降りればよいか迷わずに決めることができる。ただし、頂上までは懸命に登り続けることが重要です。

■一生懸命と本気の差とは何か

一人で懸命に掃除をしているといろんな気づきがあります。また、掃除に答えはないが、少しでも世の中がきれいになり、穏やかな社会が生まれるのなら、と思います。先日のような地震など、皆が大変なときに大事なことは、そんな思いを共有すること。そうすることでこの国はこれまでも様々な国難を乗り越えてきたのだと思っています。人の痛みが伝わってきたときに「お互い様」の思いで相手の気持ちを分かち行動できているかどうか。自分自身にしっかりと向き合い、今日一日どう生きるか決めることだと思います。

会社では私は社員に「本気でやれ」とよく声を掛けます。一〇代の社員が「本気」と「一生懸命」の差は何か?の問いにこのように答えました。「一生懸命は日々こなすことができるが、本気は自分自身を見つめ直すこととできないと発揮できない」と。本気とはついに力を入れるものと勘違いしてしまいましたが、そうすると自分も道具も相手も傷み、傷つきます。力を入れて力を入れない。この加減は繰り返し回数を重ねる中でしか身につくまいやう。やってみれば分かることはこのことでしょう。

■学びの肉体化

志は、この人と思える「先生」を得ることによつて立つ。私にとっては鍵山秀三郎相談役です。最初は先生を「凄いな」と遠い距離から眺めている。もつと知りたいたと近づくと、自分と先生の関係の「角度」はぐつと上がります。遠く眺めていた先生が、自分のまっすぐ上の位置となる。そうやってきたときには「受け継ぐ」という覚悟が求められます。

語という理屈と算盤という経済を一つにすることで、日本の株式会社という仕組みを作りました。矛盾するものを合わせて生み出す。片方だけではいけない。会社は利益を出すところであり、人間を育てるところと捉えていくと、会社はだんだん成長してゆく。自分の仕事に落とし込んで考えると、給料をいただくことが世の中を良くすることに繋がっていくかどうか。若いころは私は算盤ばかりを追いかけて会社経営をしていました。その結果、うちは運送業ですが、大きな事故があとこちで毎年起きていました。当時は運送業だからそれも仕方ないと片づけていた。しかし、会社が世の中の役に立っているのかどうかという物差しを当てられたとき、はつきりわかりました。仕事を通じて世の中に役立ったその上で、利益を確保できること。その矛盾をどう超えてゆくのか。そこを指ささないから現在も、大会社も政治家も様々な問題を起こしています。偏差値の高い学校や大きな会社に入るには高い認知能力が必要ですが、点数をつけられない世界にこそヒントがあるのではないかと。非認知能力とは難しい言葉ですが、答えを一つに求めるのではなく、いろんな感じ方ができる人間が増えていくことにより、正しい道と言うのが見えてくるようになるはずだと。

鍵山相談役は0から1までの距離は、1から100までより長いと言われました。これは0から1までの距離の中にどれほどの積み上げが必要かということです。自分自身が真剣にその問題と向き合いながら毎日毎日どう積み上げたかで初めて1となる。理屈をこねるのではなく、自分の身体で理解すること。学びの肉体化です。少しずつ積み上げていくと体の方から答えが出てくるのです。

洪沢栄一『論語と算盤』は有名ですが、論

グループ討議

一月 木南一志先生

◆Aグループ

- ・ 矛盾するものを一つにする。
- ・ 自分の仕事が生世の役に立っているのか。
- ・ 教育とは、教化ではなく感化である。

◆Bグループ

- ・ 教育とは、教化ではなく感化である。
- ・ 学は躬に学び、問いは心に問う。
- ・ 志は師によって立つ。受け継ぐ覚悟。

◆Cグループ

- ・ 微分・積分く小さなことの積み重ね。
- ・ 花鳥風月。感性。
- ・ 志。師の求めたことを受け継ぐ。

◆Dグループ

- ・ 一生懸命、本気の中で、自分に問う。
- ・ 自分自身に問いかけ、肉体化していく。
- ・ 感化力を積み上げていく。

◆Eグループ

- ・ 憧れの角度。師に近づく。受け継ぐ。
- ・ 山に登らないから迷う。
- ・ 教育とは、教化ではなく感化である。

◆Fグループ

- ・ 人は後半生を見よ。
- ・ 山に上らないから迷う。
- ・ 微分・積分。積み重ね。方程式。

◆Gグループ(リモート)

- ・ 山の頂上から眺めることが大切。
- ・ 師を持ち、師の志を受け継ぐ。
- ・ 教化より感化。



久しぶりに新年会を開催。フルート・ピアノ演奏、おみくじ、合唱と大いに盛り上がりました！



塾 生 講 話

原 周作 塾生



テーマ 無名有力

大学時代何のために生きているのか、と悩む。
その後家業である「東京魚類容器株式会社」に入社。
会社は鮮魚などを容れる発泡スチロール容器等を市場などに提供しているが、この仕事をしたいと望んだわけではなかった。しかし、ある日業者ではない一般の方からの容器のご購入があった。事情を伺えば、幼いお子様が亡くなられたとのことで、ご遺体をいれておくためということだった。

そのときにはじめて、自分の仕事は「いのち」を運ぶことなのだ、と衝撃を受け、仕事に対する意識が変わり、誇りを持てるようになった。

人間学塾・中之島に入塾し、さまざまな出逢いの中で「はがき」と「掃除」を学び、実践している。
母にはがきを書く習慣が定着し、母からもとても喜ばれている。また、塾の講師でこられた天明茂先生からも学び、家系図を作った。

あらためて社会のためになにができるのかを見直すきっかけとなった。

無名であるが有力でありたい。

いまはこの仕事が100年企業となるよう力を尽くしていきたい。

川村さゆり 塾生



テーマ 思い出を宝物に 時代を越えても変わらない大切なこと

1998年、ひとりで小さな事務所「夢ふおと」を設立。

明治生まれの亡くなった祖母が大好きだった。
その祖母の口癖が「ありがたい、もったいない、人様のために、徳を積みなさい」祖母からはたくさんのことを学んだ。

その祖母の思い出は心の中にある。思い出を後世まで残すことのできることをしたい、という発想が起業のきっかけとなった。

その後お子様を亡くされた家族のアルバム作りを手がけた。

そのときに、そのお母さんから涙ながらに「このお仕事を続けてください」と言われた。
その言葉が今も自分の原動力となっている。

東北の震災時、失って惜しかったもののトップは「アルバム」、そのアンケート結果に自分の仕事は単なるモノづくりではなかったと気づけた。

思い出はだれにとってもプライスレス。これからも心の通った温度のあるものづくりに努めていきたい。

《寺田先生に導かれて 近藤宏枝》

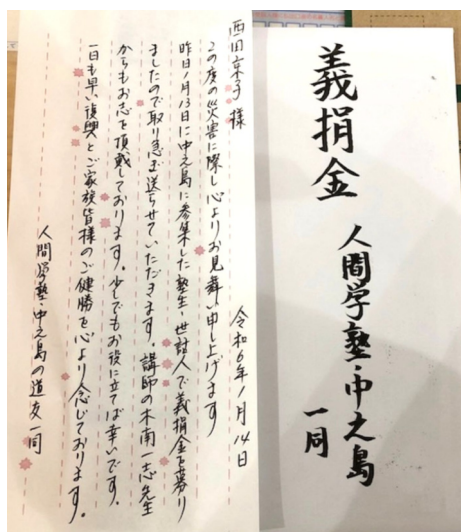
「清澄のお方」

平成二十四年十月『月刊致知』の巻頭言に中條高徳先生が、こう記されていました。「横田老師からは法話集『いろはにほへと』をご署名入りで頂いた。その中になんと森信三先生の立腰の学びが語られており、同志のように思われ、嬉しくなりました。」この一文が寺田一清先生の眼に留まり、先生たつての願いで、鎌倉円覚寺・横田南嶺管長様と初めてお出会いされたのです。平成二十五年二月号の『月刊致知』では、お二人の対談が実現致します。出会いの始まりとなった『いろはにほへと』に引用されていた森信三先生のお言葉は、横田管長様が『森信三先生 一日一語』から選ばれたもので、この本は寺田先生が森先生から学んだ事の集大成として発刊せられ、それを管長様がいつも傍らに置き愛読しておられたのですから、喜びもひとしおだったでしょう。

そして平成二十六年から、寺田先生のお計らいで「人間学塾・中之島」は管長様を、常任講師としてご登壇いただいているのです。私は初めて管長様のご登壇下さった日を、昨日のこのように覚えていきます。

その日は、「今北洪川老師に学ぶ」という演題で、洪川老師が四十五歳の時に、藩主の為に著した『禅海一瀾(ぜんかいいちらん)』の話をされました。鍵山秀三郎先生も拝聴に来られ、寺田一清先生と最前列のお席に並んで座られました。更には有難い事に、私も同席させて頂く幸せに浴したのでした。その際に鍵山先生が管長様を称して「清澄」という言葉をお聴かせ下さったのです。清澄とは、澄みきっていて清らかなことを言います。正に管長様のお姿は、清澄そのものでした。そして今も変わることなく「清澄のお方」なのでございます。

謹んで地震災害のお見舞い申し上げます



正月元旦に発生した能登半島地震。塾生の西田京子様が被災されました。心よりお見舞い申し上げます。一時、連絡がとれませんでした。1月の塾当日、元気な姿をリモートですが、皆様と拝見することができました。



1月の塾当日、人間学塾・中之島の皆様に義捐金をお願いしたところ、多くの賛同をいただきました。皆様本当にありがとうございました。塾からのお見舞金と共に、西田様にお送りしています。能登の一日も早い復興をお祈りしています！

講座当日は、座席指定ですが、混雑が予想されます。お早めにお越しください。



25年生生まれ）日本の実業家、著述家。本名は祐輔。生命の燃焼を軸とした生き方を実践・提唱している生命論・人間論研究者。菌酵素食品の研究・製造・販売の事業である（株）日本生物科学（株）日本菌学研究所を経営。独自の美術事業を展開しており、執行草舟コレクションを主宰、戸嶋靖昌記念館 館長を務める。

3月は第三土曜日です！

『ウィキペディア (Wikipedia)』より

執行草舟（しぎよう そうしゅう、（昭和25年生まれ）

- ◆ 日時 3月16日(土曜日) 13時～
- ◆ 会場 大阪大学 中之島センター 10階 佐治敬三ホール
- ◆ 講師 執行草舟 先生
- ◆ 演題 「道徳とは何か — その逆説的真相 —」

《人間学塾・中之島》次月日程

人間学塾・中之島 編集部メールアドレス

原稿等はこちらにお願いします！

2012nakanoshima@gmail.com

中之島ニュースは塾生の皆様のためのものです。無断で転載・配布・SNS利用などはご遠慮ください。

人間学塾・中之島 編集部

編集後記

今般の能登震災で亡くなられた方にお悔み申し上げます。また、被災された方々にお見舞い申し上げます。一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

正月から能登震災、翌日は羽田空港の飛行機事故：新年早々波乱の幕開けとなりました。もうこれ以上は…と思います。

さて、1月の木南一志先生。今年も学ばせて頂くことばかりでした。皆様で、憧れから、先哲、森信三先生、寺田一清先生の志を受け継いで行こうではありませんか。

塾生講話、原周作様、川村さゆり様、本心に心に沁みるお話ありがとうございます。新年会では、木南一志先生も参加され、大盛会でした。そして、春よ来い！

編集長 西村俊幸